

第 4 回検討会（5 月 20 日開催） 事例集に関わる発言抜粋メモ

・当事者が主体的に関わる学びの場というところを目指すというところで、当事者がどういうふうに関心メンバーとして参画していけるかということのステップを示せるといい。日頃の何か日常的な会話の中にある声をひろって学びの場づくりに生かしていくということが、とても重要（大森）

・社会的にまだまだ未熟な段階の若者たちが社会に関心を持ちたいとか、政治に関心を持とうとかとやってきた頃のユースワークを映像で見たことがあるものを今日の前で見ているような、そんな印象（志々田）

・当事者性を半分ぐらい持っているんですよ。その上でこういう活動に関わってくる。それぞれ皆さん、それなりの当事者性というのは持っていますので、その当事者性と自分の持っている専門性というか、スキル、どういうスキルがコーディネーターとして役立つのかということをもっと明らかにする必要はある（平井）

・その場に入ってくるまでに、その若者たちが背負ってきた歴史というのかな、どういうことをこの間考えて、この場に来るに至ったのかみたいな話をどうつかんでいくといいのか。これは知的障害のある人だけの問題ではなくて、みんな相互理解するために必要な部分。（梶野）

・とにかく本人ということに私たちは軸を置いている（大森）

・学校と学校外も、福祉とかとかも含めて、真ん中の論理を弱めて外側に行くようなことが多いんだけど、（学びの会は）外側の論理が中心を作っているような感じ（青山）

・オープン、クローズ、当事者参画、自前で場所を作る、そういったところが目立ったコンセプト（津田）

・場を作るとか、個別対応するとか、安心を作るというような側面で言うと、要するに雰囲気とか文化を作るというような側面で言うと、あの元気な退職教員たちは、かなり大きな役割を果たしているんじゃないか
コーディネーターだけが 1 人で引っ張っていくというイメージでない（津田）

・障害者青年学級に近い空気を感じながらも、でも、全く新しい場がこの 4 年前ぐらいから動き始めているという意味で、何かこういう場が 1 つのモデルに（井口）

・ジャーナリストティックにある部分では外からどう新しいかが書ける人がいると、この読み手の人たちには伝わる部分もある（青山）

・市町村の委託研究の応募のときにもいろいろな行政の方たちにプッシュしたりする中で、イメージが湧かない。何をすればいいんだというような声がやっぱり多い。実践、障害のある人たちの学びの場を作るということが一体どういうイメージを持てることなのかというところで、ある程度多様なイメージが湧くような冊子というのが行政の方たちにはあったほうがいい（津田）

・1つは当事者のニーズが明確になっているという、当事者のニーズから始まるわけですから、行政の皆さん等が読んだときに、ああ、やっぱり当事者ってこんなことを欲しているんだという、そういうニーズを明確にするということ。2つ目は、どんなサポート、どんなコーディネーターが大事かという、サポートというかコーディネーターというか、要するに担う人がどういう人が担うのか、どういう担い方をするのか。その人たちはどういうスキルを持っていたのか、持っているのか。きっかけでもいいですね。そういうコーディネーター。そして3つ目には、当事者の変化だけではなくて、それが地域や社会にどういうインパクトを与えているか。（平井）

・グラフィックレコーディングで提示したら、ピクチャーシンキングの人たちには非常に分かりやすい（平井）

・別に障害者の生涯学習支援をできる人というのは特別な人じゃないはずだし、そう特別な人にしちゃいけないんじゃないか。

私たちは社会教育を公正に運用できていないんだよねということが分かるような読み物をやっぱり作らないといけない。（志々田）

・キーワードで並べていく。そのキーワードの中に事例が出てくるみたいな逆の構成も確かにあり得る。

キーワードごとに皆さんにコラム的に書いていただくほうが確かに、書くのもアプローチしやすい。（井口）

・1 ページ目はやっぱり面白いというふうに食いついてもらえるような実践の風景だとか、そこで何が起きているかみたいなことがあるといいのかなど。それは社会教育的なものであるということが実感できるような内容であるということが1 ページ目。2 ページ目は、それがどういう原理によって成り立っているのかというようなことについて書く。3 ペ

一ページ目に、そのどんな人が、誰がどんな気持ちでやっているのかとか、どういう人たちが組み合わさるとこんなことができるのかとかいうようなところですね。4ページ目がニーズとか感想、これは成果と言いたいところですけども、これ、成果を書くのは難しいのではないかなというところで、成果ではなくてやっぱり、活動している人たちがどういうふうな声を上げるのかという声を拾っていくような、そういう構成はどうか。(津田)

- ・特別支援学校は卒業生のところまでは管轄でいけるけれども、地域のほかの障害のある成人となるとかなり距離が遠い(津田)

- ・地域の人が学校に向かっていくというベクトルをどう作れるかみたいな形で何か問題が提起できるほうがいい(梶野)

- ・今、放課後の活動などは全部放課後デイに取られちゃって、要するに民間のそういった事業者のサービスを利用したいという保護者の声があって、むしろ、地域で動き出したものの動きが衰退している(梶野)

- ・社会教育スタートじゃない人たちが社会教育を担ってくださる文脈と社会教育の人たちに届けていくと、この2方向の中で、もう1個の動きとして見ることもできるかなと。ただ、そこには福祉の専門家でやってきたからという話と、学校教員としてやってきた話はまたそこは線が必要かもしれません(青山)

- ・我々は人垣支援という言い方をしているんですけども、彼らを地域の中で守っていくためには、こうした重層的な支援の輪がないと守り切れないんだなということがだんだん分かってきた(平井)

- ・実際には、その社会教育の職員がこの専門家の人たちと肩を並べて議論するというような状況は、現実にはほぼないという状況
自立支援協議会がうまく学びの場として機能するためにも社会教育の原理がそこに持ち込まれるべき(津田)

- ・キーワードと柱か何かを作っていって、そこに事例を流し込んで、QRコードをくっつけて1つの事例を書く人がいて、それをそこに関わっていない人がどう見たか。社会教育主事としたら、どう受け止めて、自分だったらどういうふうに動こうかみたいな、コメントか何か寄せるような立場で参画できる(梶野)

- ・既存にあるものを少しプラスアルファして9から10にしてみる(鈴木)